友だちといっしょに楽しんで取り組む子

田　村　洋　子

はじめに

小学４年生頃より徘徊、奇声、友だちへの悪態など著しい集団不適応行動が見られるようになったＨ男は、本年度４月に公立小学校から本校中学部に入学してきた。しばらくの間、友だちと行動を共にすることができなかったが、学校生活に慣れ、自分を受け入れてくれる先生や友だちの存在を感じ始めた頃より、落ち着いて教室にいることができ始めた。

経験を拡大し、楽しさを積み上げていくと、少しずつ自信を持って行動する姿や、他学級・学部の先生や友だちにも声かけをしている場面が見られるようになった。このように落ち着いて集団活動に参加し、コミュニケーションの輪も拡がってきたＨ男について述べてみたい。

１　プロフィール

(1)　生　育　歴

・昭和56年２月13日生　12歳９か月　中学部１年生　男子

・精神運動発達遅滞

・熟産　低体重児（2130ｇで生まれ、２週間保育器に入る）

・４年保育　言語・行動に遅れが見られ、いつまでも一人遊びが続いた。先生の側から離れられなかった。

・公立小（普通学級）での諸検査等は、実施不能及び測定不能

・平成５年４月本校中学部入学

・家族は、両親と兄（中２）、本人の４人家族

着がえもしないですねているＨ男

(2)　諸検査による実態

・**知能検査**　IQ45（WISC－R）

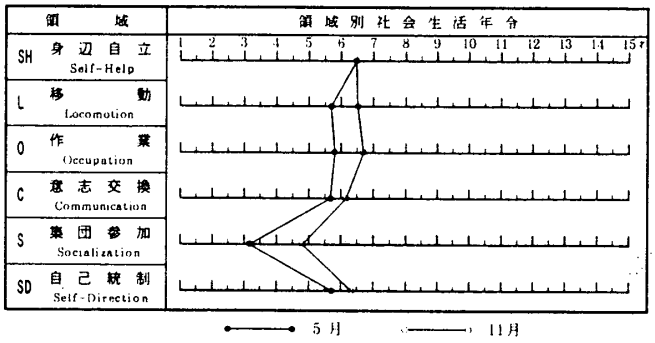
・**Ｓ－Ｍ社会生活能力検査**（右図）

５月…SA５：３

集団参加領域が著しく劣る。(3:1)

11月…SA５：11

全体的に力が伸びているが、集団参加領域はやはり劣る。(4:9)



Ｓ－Ｍ社会生活能力検査

・**コミュニケーション・サンプル**

要求と拒否・拒絶の言葉、同じ言葉の繰り返しが多く、指示に適切に反応できないことがある。独特の奇声（「ケーケケケケ」「ギャハハハ」「ヒッヒッヒッ」など）を発し、独り言を言う。

(3) 行動特性

・集団活動では、一人勝手な行動をとることがあるので、側にいて細かい指示と監督が必要である。

・緊張すると吃音になり、頭を振ったり独り言を言ったりする。

・まちがえたり失敗したりすることを恐れ、不安のために担任を目で追っていることがある。

・友だちと関わりたい気持ちは十分にありながら、言動が乱暴だったり不適切であったりするため、誤解されがちである。指摘されると、直そうとする様子が見られる。

・手段・方法がかわると、真面目に取り組むことができる。

2 取り組みの構想

(1) 指導仮説

経験不足や劣等感も手伝って、常に集団の場から逃避してきたH男にとって、まずは「集団の場にいる」ということが大きな課題であった。人を大切にし、豊かに関わって生きる力を育むには、この課題をクリアし、友だちと活動する楽しさを真に学ぶことが重要と考え、次のように設定した。

〈指導仮説〉 期待と不安の入り混ったH男の心情を大切にしながら、機を逃さず声かけをし、活動の中に引き入れていく。腕を取り共に活動し、小さな成就感を共有していくことにより、信頼関係が培われていくと思われる。失敗や未知の事については、その都度具体的な指導を行って、安心感と自信を持たせ、実践の場では、常に励まして少しでも成就感を味わわせるように配慮する。それとともに、反省すべき点は明らかにし、次回への期待と意欲を持たせるようにする。この積み上げにより、自ら人の話を聞こう、人に話そうとする意欲と態度が養われ、友だちといっしょに活動する楽しさを知ることができると考える。

↓

めざすコミュニケーション像　相手の話をよく聞いて適切に応答する子

↓

〈つけたい力〉
・相手の顔を見て、話を聞こうとする態度
・意欲を持って話そうとする態度と自分の気持ちや考えを適切に表現する力
・相手や場に応じた適切な言葉遣いと礼儀作法

(2) 指導方針

①ひとつひとつの言動を正確に把握し、是正すべき点があれば、具体的に繰り返し指導をする。

②できたらほめると同時に、悪かった点についても気づかせ、次の目標への励みと意欲を持たせる。

③初めての活動で多少の不安と抵抗があっても、できるだけ集団から離れないように配慮する。

3 指導の実際

(1) 日常生活の指導の場面より

基本的生活習慣や生活・学習のきまりを身につけることを目指し、最も基本的な学習の場として日常生活の指導に重点を置いた。指導する課程では、H男の心の安定を図ることを第一とし、担任との信頼関係を築くことから始めて、学級の友だち、学級外の先生や友だちへと人間関係を広めていくことを念頭に置いた。聞く・話す態度を養い、コミュニケーションの拡がりを求めて、指導を進めた。

① 正しい姿勢の保持

体を斜めに傾けポケットに手をつっ込む。机に片肘をつき、足を組んで椅子に座る。両足を机の上にのせ、椅子を揺らしている。というのが、H男のスタイルであった。身体が硬く、力を抜くことができにくいため、常に担任が手を添えて姿勢を直す指導と自覚をうながす声かけを続けた。現在では、「先生、こうか？」と自分で直そうとすることもあり、今までより多少長く正しい姿勢を保つことができるようになってきた。学級のL男に、「L男君、椅子の上に立たないで下さい。ねェ、先生」と、うれしそうに注意をしているH男の姿は、ほほえましくもある。

また、4月当初、あまりにも見苦しいH男の態度に、学級のN男が注意を始めた。「手！」「足！」と、担任以上に口やかましく注意をするN男の存在は、「うるさい！」と反発しながらもH男の心を開くものがあったようで、H男は注意されることを期待しているような態度を示し始め、笑顔も見られるようになった。友だちの声に反応し始めた一歩であった。

② 話す人の顔を見ること

顔を斜めに傾けて上目使いに人の顔を見たり、相手の顔を見ないでキョロキョロ、そわそわしているH男には、簡単な指示も通りにくかった。「人に聞く」こともできず、友だちが動くのになんとなくついていったり、何をしたらよいかわからずウロウロしていることが多かった。

「話す人の顔を見る」指導は、H男の要求の場面から始まった。自分の不安や要求は、何度も同じ言葉を繰り返して訴えてくるので、その都度、両頬を手ではさんでこちらを向かせ、視線を合わせることを試みた。初めは逃げよう逃げようとしていたが、顔を見て話をしないと自分の要求が通らないことがわかると、視線を合わせる努力を始めた。要求を受け入れるパターンは、次に示す。

(a)「それで？」(事実の引き出し)→(b)「だから、どうしたいの？」(気持ちの引き出し)
→(c)「なるほど。それで○○したいんだね。」(確認)→(d)「○○しよう。」(受け入れ)

また、ゲーム感覚でお使いなどをたのみ、「困った」「できた」「うれしい」「相手が喜んだ」などを体験させる場面の設定を繰り返した。H男は、一度できるとそれを大変喜び、何度も「できた、できた」と言っては、次への意欲と期待を持った。その喜びを伝えたくて、回りの人々に話しかけるようになっていった。話す人の顔を見ることができるようになったH男は、悪びれずに真っすぐ前を向いて、「わかりません」とはっきり自分の気持ちを言うこともできるようになってきた。

③ 朝の会でのやりとり

朝の会の流れは決まっているのだが、日直の司会にも個性があり、ひとりひとりが生きる場となっている。H男も一通りのやり方を覚え、司会ができるようになった。

日記の発表では、質問をしたり答えたりすることで「聞く」「話す」意欲と態度を養うとともに、内容を理解する力を育てることもねらっている。最近では、会話がちぐはぐしてくると「おかしいな。」「わからんな。」と生徒の中

N男と談笑するH男

から声が出るようになってきた。質問者も発表者も自分なりに考えて言い直しをしたり、「わからないので、別の質問にして下さい。」と切り返したりするようになってきた。

H男は、朝の会で友だちの話をよく聞いているようになった。「あっ、おれと同じだ。」「なんで○○しなかったんだ？なあ、なあ、S男君。」など、つぶやきや友だちへの声かけが増してきた。「質問してみれば？」とうながすと、「はい！」と元気よく手を挙げて、はりきって質問をする。「いい質問だなあ。」とほめると、笑顔満面である。最近では、「H男君、ぼくに質問して下さい。」と指名を受けることが多くなった。毎朝の友だちとのやりとりの中で、H男は「話し方」も学んだ。

(2) 生活単元学習の場面より

H男にとって生活単元学習は、持てる力を発揮し、経験を豊かにする実践の場である。これまでの遊びや経験が不足しているH男には、どの活動も新鮮で魅力的なものであった。回数を重ねるごとにできることが増え、先生や友だちとのコミュニケーションが拡がっていった。

生活単元学習の取り組み

生活単元学習	取り組みの様子・つぶやき
校内宿泊学習（4月）	日程等を何度説明しても、「明日泊るんですか？」「いつ帰れる？」「宿泊なんかせん！」など、話が全くかみ合わなかった。実際に宿泊を経験すると、「ああ、おもしろかった。またしたいわい！」の連発であった。
野外炊飯（5月）	宿泊の経験を生かして、米をとぐ係になった。「うまいねエ。」とほめると、「へへえっ。うまいでしょ。」とうれしそうにした。家庭からの連絡では、家でも米をといでくれるとのこと。「おれは米をとぐのがうまいからぁー。」とはりきって言って回っていた。
ミニキャンプ（7月）	話し合い活動では、うながされると話そうとしたり、声かけがあるとその時だけは聞こうとしたりした。注意が持続せず、独り言を言っていることが多かった。話し合いに参加するのは難しかったが、指示されたことはできた。テント張りでペグ打ちを指示されると、道具を持ってやろうとしていた。
大山林間学校（10月）	昨年の様子を写真で見て、「見ーちゃった。」とはしゃいだが、「何食べてんだろ？」など疑問をもち、質問をしていた。しかし、言い方がわからず、先生の口真似をして質問をした。黄班で中2のC男を意識し始めた。C男がちょっかいを出すのを「いやだ！」と言いながらも期待しているようだった。

米とぎをするH男

4 考察と今後の課題

回りの人々の叱咤激励によってさらに努力し、がんばろうとするH男の姿には、本来持っている素直さや真面目さが感じられる。自分を受け入れ、認めてくれる仲間（集団）があることの安心感は、H男にとってかけがえのないものであろう。しかし、奇声や独り言、独特の奇異なポーズや初対面の人にでも平気で行う攻撃的な態度など、不適応な言動は今だに見られる。悪意はなくとも決して受け入れられる態度ではなく、今後のH男自身の努力と心の安定によって減少していくものと期待する。

社会自立へ向けて、家族及びH男自身が障害をどう認識し乗り越えていくかが大きな課題となるであろう。本年度のH男の変容をステップに、今後は、基本的な集団としての家族と身近な集団としての学校を中心に、ルールを正しく身につけながら、伸び伸びと自分を表現する力を育てていきたい。